「松風（先生）の遊びの中に哲学を探そう」2007 年 10 月号

目次（ごあいさつ）

（１）囲碁と将棋
（２）哲学
（３）マンスリー・りーこむ

（ごあいさつ）

こんばんは、10 月も半ばを過ぎました。みなさんいかがお過ごしでしょうか。寒くなったり暖かくなったり体調管理が難しい時期になりました。丈夫なのが取り柄の私も珍しく風邪気味になってしまい、一年ぶりくらいで薬を飲みました。

今月は囲碁と将棋、哲学、マンスリー・りーこむという構成でお届けします。どうぞ最後までお楽しみに（2007 年 10 月 23 日　高山大祐）

（１）　囲碁と将棋

・将棋王座戦～3 連勝で羽生防衛

羽生王座対久保八段の将棋王座戦は、相振り飛車が 2 局続いた後、居飛車対振り飛車の急戦になりました。後手居飛車は、当初の 32 から 22、12 と戦いながら移動、船囲いらしい陣形の変化が現れました。将棋は一時先手久保八段優勢と言われましたが、先手の飛車を押さえる 68 歩が好手だそうで、際どい勝負になりました。68 歩で 69 金と飛車を取ってしまうと、先手玉へ迫ることが難しくなります。

最終盤もどちらが勝ちか分からない将棋でしたが、先手に勝ちはありそうでした。1 路遠い 12 玉が、局面を読みにくいものにしていたのかもしれません。これで羽生王座は 16 連覇。おめでとうございます。（2007 年 10 月 4 日）

・駒の連結～桂による連結

大駒連結シリーズが終わり、今月から小駒の連結について書き

ます。小駒については、同種の連結だけでなく組み合わせについても書いていきたいと思います。同種だと、香車のように 1 通りしかないものもありますので。

【有名な攻めの繋ぎ桂」

後手の美濃囲いに対して 66（86）桂から 74 桂とつなぐ「つなぎ桂」は、有名な手筋です。角、金、銀、桂 2 枚で、いきなり後手玉が危険になるという素晴らしい威力があります。冷静にみると、かなり駒が必要ではあるのですが、仮に持ち駒がなくても、つなぎ桂は遠くからいきなり攻めることができるので、終盤の入り口あたりでも使います。王手のかかりにくい美濃囲いに小駒で王手をかけるのは、香よりもやはり桂です。

同様に、相居飛車戦で時折見られる、後手から 73 桂に 65 桂打ちも有力な手筋です。何が何でも相手陣に迫ろうという手です。

【桂と歩金銀香の相性】

桂の利いている 2 箇所に小駒を打ち込む。これは、攻めの基本といってもいい形です。歩を飛び越せる桂は、やや遠くから攻めの拠点をつくるのに非常に効果的です。打ち込む駒は金銀香歩何でもいいといっていいほどです（桂だけは時と場合を選びますが）。

しかし、受けの形は金より銀です。例えば矢倉の将棋で、89 桂の利いている 77 と 97 に打つのは、まず銀です。香、歩を打つときはたいてい飛車を追い払うとき、他にしょうがないときで、金を打つのも、銀がないからという場合が多いと思います。

ここまでは、桂の利きに駒を打つ場合。比較的分かりやすいものです。

次に、小駒を支える桂打ちについて考えてみましょう。この場合でも攻めの桂打ちは、初めは見えずらいかもしれませんが、やはり簡単。例えば先手で相手陣に攻めて、81 玉を狙って 73 銀と打ち、後手は 71 銀と受けてきた。そこで 85 桂と攻め駒を足す。このような流れで、金銀の受けに桂を足して攻めると、確実に相手の金気（かなけ；金銀のこと）を 1 枚減らすことができます。狭い場所では、桂は受けに働いてくれません。自然に先手の攻めが厳しくなります。

これに対して受けの桂打ちは、かなりの上級者が使う手筋です。受けの得意な振り飛車党の人などはよく、自陣に桂を打って駒を支えます。一見もったいないようですが、相手の攻めを遅らせながら、

「置いておくだけで将来ありそうな相手大駒の利きを消す」という働きもあります。例えば、77 の角を 69 桂で支えることを考えて見ます。桂を打つことで、角の威力を残すか、或いは使えない角に交換の余地を残しつつ、遠くからの一段飛車の威力を弱めています。特に後者の感覚は、初めのうちはなかなか掴めないのではないでしょうか。もしも、軽く考えて 29 飛車などと安易に下ろして、相手に 59 金打ちとでもしたら、最初は無意味に見える 69 桂が俄然光って見えてくるかもしれません。69 の地点で押し問答にでもなれば、それこそ振り飛車ペースでしょう。

桂はチェスのナイトほどの威力はありませんが、縦方向の利きの範囲は同じです。それだけに使い方次第で、ナイトなみに怖い存在にもなるし、今なら相手に渡しても大丈夫という、安全パイにもなる面白い駒です。さて今月はここまでです。次回は香車。金気に対して、桂や香は木気とでも言うのでしょうかね。ここ日本には木の文化があると言われます。桂や香も使い手次第で自陣の屋台骨を支える檜にもなることでしょう。将棋の陣形は目で楽しむこともできます。次回もお楽しみに。（2007 年 10 月 4 日　高山大祐）

（２）哲学

まず第 2 回の補足をしておきます。『というわけで、観測者は、ある任意の結果に対して連続的な産出物の過程を見出すことができます。なぜなら、第 3 極では、あらゆるレベルで産出が行われているからです。そして、観測者がある情報とその連関を情報に直して成型すると、その情報の加工のプロセスは 1 つの系列で直線的なものとなります。』

やや分かりにくいこの箇所を再度取り上げます。対象は、世界全体との関係では明らかに有限でありながら、それ自身としては 3 重に無限な構造（※「数」を参照してください）をしています。環境（第 3 極）というのは、このような対象の集まりであり、それを「読む」のならば、やはり同じようにどこをとっても「3 重に無限な」対象に出会うこととなります。1 つの対象は遅かれ早かれ具体化し、対象の無限性は単に可能性として潜在するに過ぎませんが、「第 3 極を把握する」と問題設定するならば、この無限性は尽きない泉となります。このような第 3 極の任意の断片を記述するならば、それは行為の性質によって 1 列に産出され、かつ表現されているところ

のものは連続的な性質を示します。
　相当省略して書いてしまいましたが、第３極をそれとして理解しようとすると強靭な無限性の様相と出会うこととなります。
　第３回では、環境において見出される連続性に、人間的な行為がいかに不連続なものをもたらすのかを述べていきます。

　１）時空的な情報による配列
　いわゆる自然な環境は、あらゆるレベルであらゆる向きに力が行きかうような様相を呈しています。時空的情報と私が呼ぶものは要するに言葉のことです。物質を単純な文に関連づけるだけで、いかにも人為的な状況が出現します。「これをあそこに置く」。石を地面に置く、そしてその隣にまた石を置く。例えばそんな単純な情報を実際に実行するのならば、その結果は「誰かが石を並べた」と見えて、よほどのことがない限り、自然現象とは考えられないでしょう。
　時空的な情報を言語と同一視することに、或いは抵抗を感じる方もいるかもしれません。それは無理もないことです。しかしながら、絶対的な時間と空間を前提しないならば、局所的かつ任意に選ばれた時空的対象の絶対的な位置を指定することはできません。指示した本人でさえ、それを厳密に同じ形で指示し続けることはできず、誰も「それはここにある、ほらこれだ」とは言えませんが、それにも関わらず任意にある範囲の時空を指示することは依然として誰にもできます。これは私の著作における対象の「等価的性格」と呼ばれるものです。こうした「任意の時空間」の性質は、この世に厳密に対応する物質的な指示対象を持たないという意味では、抽象的といって差し支えないものです（し、数においてもこの対象は無限です)。そして、可能な限り、観念の抽象性という別個の世界を定立することは避けるべきだと私は思います。
　さて、この節の要点は、一の時空的情報配列に由来する行為・持続は、直接的な産出物から、その再帰的適用による産出物に至るまで、同じレベルの行為主体に由来し、その前後の段階に連続的に対応する行為主体が必要ないということです。【それは､時空的情報の産出が被造物にとっては最大マクロな情報産出だからで、その前提となるのは､「言語発話等が可能であるような物質的対象｣といった性質だけでよく、産出された時空情報に対応する行為主体の内部属性はその情報と連続的な因果関係を持ちません。例えば心臓の活動は、周囲との連続的な因果関係のうちにあります。しかし言語情報

はそのような生理的因果関係のうちにはない、ある意味で行為の系列の終局的な位置を占めます。この点を軽視すると、言語の全ての側面について、身体器官に可能なのと同様な生物の進化論的な見方を適用することになりますが、それは事の様相を見誤ることになります。】　さて話しを戻して、こうした情報配列によって指定された物質の配置においては、物質自身を構成する自然な成り立ちとは別の起源が含まれていることになり、それらは連続的な関係にはありません。もし、全てが連続的な物質的因果関係の網の目のうちにあるのなら私たちは「今もエデンにいる」はずです。つまり、自然の調整作用を信じて暮らすことができるはずなのです。しかし、私の考えでは、そうではありません。

さらに、なお 2 つの論点があります。1）経験的に、言語情報は（意味は別として）複数の主体で共有される。そして、そこで共有されているものには、音素や形態の類だけでなく「命題および論理構造」が含まれる。後者は、そもそも外部論理が、部分的対象に共通のものだからです。これを明示できないときには、よく言われる言語ゲームの迷宮だけが言語の特徴ということになってしまいます。2）言語圏というものが社会には存在し、同じレベルとみなしてよい時空的情報配列は一の行為主体を超えるということ。

時空的な情報配列を介して物質を配列させるとき、「私がここのものを 5cm 脇へ寄せる」だけであっても、その対象領域には時空的情報に由来する痕跡が含まれることになります。そしてその行為をさせる情報配列は、行為で生じる力そのものとは違いその対象領域における他の要素とは連続的な関係にはありません。1 つだけでは目立たない相違も、規模が大きくなると目に見えて顕在化することになります。

２）無意識

無意識は精神医学で有名な言葉ですが、私の理論においてはまた別の意味を与えられます。一般的に言及される意識的活動に対する無意識は、非領域に含まれる関係にあります。非領域は肉体的なものではなく、固有の領域を持ちませんが、行為主体に対して全ての外部環境を表します。行為は不可避的に第 3 極・非領域に痕跡を残します。自然環境におけるあらゆるレベルでの動きは、もし観察されるなら、それぞれにそれぞれの非領域に独自の痕跡を残します。

こうして、想像上のものではありますが、第 3 極・非領域の中に

非領域の非領域のようなものを仮定することができます。このような2次的な非領域の性質はどうか？　もちろん、第3極・非領域と「全く同じ」です。非領域のどの部分にも連続的な系列を見出すことができるでしょう。

行為と非領域の関係を、今度は時空的情報配列に当てはめて見ましょう。行為とは、そのときそのときの産出行為に関わり、非領域には「その産出行為」を除く全てが含まれます。これが意味することは明快です。非領域に時空的情報配列由来の対象領域も入り込むということです。現代社会を眺めてみれば分かるように、記録される情報は飛躍的に増えています。これは、もちろん進歩と呼べるものですが、同時に無意識的な情報が増加しているということでもあります。

前項で述べたように、時空的情報配列に由来する対象領域は他の部分との連続性を持っていません。本来自然環境におけるさまざまな出来事は、環境内部の連続的な反応によって平衡に向かっていくと思われますが、人間的な行為の集積にあっては、それだけでは回復できない部分が含まれます。

それは、ノートに際限なく書き記しても記録そのものを消去することはできず、燃やしてしまわなければ記録を消すことはできないと、喩えることができるかもしれません。ある命題を否定することはできても、或いは意味は打ち消すことができても、情報自体は行為主体が停止しない限り消えることはありません。そして言葉を共有する社会では1人の死は、その人に関わる全ての情報の消失にはなりません。その人が与えていた意味は消え去りますが、情報は社会に残ります。言葉と自然をつなぐものは、本来個々人による意味づけに他なりませんが、現代社会においては急激な膨張の結果、情報（言葉）だけが残り、自然な平衡作用とは一段離れた大きな無意識となります。個々の人間の無意識なら、苦しいことがあっても、放っておいてもいずれ直ったり、或いは言葉による癒しや激励によっても以前の状態を回復することができます。つまり、自由な個人の関係において調整することが可能なものです。

しかし、今述べた人工的な第3極に由来する問題の場合には、それだけでは回復できないでしょう。人間の無意識は、人間の身体という物質的な自然を基礎に生じてきますが、人工的な第3極では、内容を問わず、行為主体だけに由来した時空的な情報配列から成るからです。

３）
こうして見てくると、現代社会には環境のうちに既に時空的情報配列に由来する領域が混在していると言えます。この領域は、ここがそれだと同定できるわけではありませんが、人間社会の営みに付随して、一定割合で存在すると言っていいものです。そして、領域の特徴の１つが、周囲との不連続性です。時空的な情報は、同種の領域同士では結合しやすいですが、それ以外の（つまり全ての自然な環境）とは自然な結びつきは持ちません。
でも、言葉だけなら問題は起きません。それは時空的な情報に過ぎないからです。詩を 10 万回詩っても、それだけなら自然環境に不連続な領域が出現することはありません。なぜ、それが現実に影響するのか。それは、この時空的情報配列が物質の配置を指定し、長期に渡って継続しているからです。そのような振る舞いの継続が、人間的行為の結果と環境に１つの谷間を形成します。

さて今月はここまでです。次回をお楽しみに。（2007 年 10 月 24 日　高山大祐）

（３）マンスリー・りーこむ

・テスト勉強に勤しんだ日々
さてリーコム代表の私、STF 協会会長として趣味の良い娯楽普及をしないとならないという重責もひしひしと感じつつ、娯楽もいいが、現実的に何か人の役に立たなければならないのではないだろうかと思い立って資格試験の勉強を今年に入って始めまして、先日その試験を受けてきました。
他人が用意した正解を限られた情報で当てるといういわゆる勉強は、哲学に要する思考とはまた違った難しさがありました。難しいということは努力しなければならず、当然の結果としてあまり楽しく遊べないという事態が発生しました。
結果のほどは分かりませんが、ペースは何となく分かったので、今後も違う分野にチャレンジしていきたいなと思っています。（2007 年 10 月 23 日　高山大祐）

■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■
【編集後記】
　今月は、いつもより発行が遅れてしまいました。テストがあったり、ボランティア先で書類をつくる仕事が増えたり、風邪を引いたり、ホームページづくりを手伝っていたためではないかと思います。
　（2）のような文章は、公開しているファイルよりは、比較的軽く書いているのでそれほど莫大な労力はかけずに済みますが、ショーペンハウアーが述べる通り、真剣な思考は、「さあやろう」といって簡単に始められるものではありません。時間をつくりながら、始める機会を伺っているようなところがあります。
　そして今月、時間があるときに思ったのは、瞑想と集中は、後者が能動的であるのに対し前者はリラックスに関係するけれども、両者はやはり似たものであろうということでした。集中できたときにも、一種の癒しを感じることがあります。一日中仕事をしている現代社会では、息抜きにせよ趣味にせよ、自分の時間を持つことが大切になるのでしょうね。（2007 年 10 月 23 日　高山大祐）

――――――――――――――――――――――――――――
メールマガジンのバックナンバー・登録・解除はこちら。（自社版、まぐまぐ、めろんぱん、カプライト、メルマ版の登録と解除が下記リンクのページでできます。）
http://www.lc-lih.com/mailmagazine.html
lc-lih.com の玄関
http://lc-lih.com/
論文掲載・研究・出版のページ
http://www.lc-lih.com/
Re/S/Forum（交流・文献用）
http://lc-lih.com/community/
遊扉閣（遊び、音楽、映画等）
http://play.lc-lih.con/

お問い合わせ
info@lc-lih.com

著作者（特に記されていない場合）　高山大祐（松風）
発行者　lc-lih.com（代表　高山大祐）

本著作権者（高山大祐）は掲載内容の無断転載、編集、改変を認めていません。
copyright(c)2007 Daisuke Takayama/“lc-lih.com” all rights reserved
****